
悪魔の賭

麻未夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の賭

【Nコード】

N3860P

【作者名】

麻未夢

【あらすじ】

海外での移植手術。他人事でしかなかったそれが、孫の身に降り掛かり、何故自分の孫がこんな目に遭うのかと神を呪う一人の女性。そんな彼女の前に悪魔が現れ、孫を助けてやろうと、ある賭を持ち出した。それは彼女にとって、あまりにも有利な賭である事から、彼女はその賭に乗った。

毎年の様に現れる、移植手術を受ける以外に助かる道のない可哀想な子供をを救うための募金活動。

若い頃の私は、理屈とも屁理屈ともつかない理由を掲げ、たとえ行く手を遮るように、その母親や父親が涙ながらに訴えて来たとしても、断固としてその箱に小銭一枚も投入する事は無かったものだ。だが、そんな私も人の親になり、そして初孫が生まれると、少々胡散臭い気持ちは晴れないながらも、孫の身に降り掛からないとも言いい切れない『明日は我が身』のような気持ちもあって、千円札の一枚も入れてやる寛容さを身につけてしまった。

そんな私を呆れ顔で見る息子夫婦には、
「良いじゃないの、お賽銭のような物よ。神様だって見てるんだから」

などと笑い、さっさとその場を離れていく。

勿論、ただの冗談だった。

まさか本当に、それが孫の身に降りかかると知っていたのなら、あんな事を決して口にしたはずがない。

「1億円……………」

貯金をかき集め、親戚を頼りにしても、まだそれだけの大金が足りなかった。

「それでね、ある団体から募金活動のお手伝いをしたいって申し出があったんだけど」

嫁は憔悴しきった顔で、そう呟いた。

「今すぐにどうこうってわけじゃないけど、突然容態が悪化する事もあるみたいだし、どのみち移植手術を受ける以外の道はないって言われてるし。……だけど、移植した臓器が合わなかったとしたら、

結局———」

最悪の事態を想像し泣き崩れる嫁に、私はかける言葉も見つから

ず、ただその肩を抱きしめるしかなかった。

「……とにかく、病院に行つてあげなさい。検査ばかりで、そろそろグズり出してる頃よ。私の前でなら幾ら泣いても良いけれど、あの子の前では泣いては駄目。良いわね？」

「はい……」

孫の好きな絵本やぬいぐるみを紙袋に詰めて嫁に渡して病院に送りだした後、私は孫のベッドに腰掛けて両手で俯けた顔を覆い、神様を呪うように呟く。

「あんな見ず知らずの子供達のためにお金を出してきたのに、どうして私の孫がこんな目に――」

パチパチパチ

「え？」

突然すぐ側で聞こえた拍手に、私は顔を上げた。

「初めまして、悪魔です」

そこに立っていたのは、髪の毛から靴の先まで黒尽くめの若い男だった。

「私と契約しませんか？ なに、あなたの魂を貰おうって話じゃありません。そうですね、契約と言うより賭けでしうか」

「……賭け？」

「私がお孫さんの心臓を治してあげます。ただし、そのお孫さん、今6歳でしたっけ、そうですね……じゃあ10年後、助けた甲斐があったと、あなたに思わせるような良い子に育っていたら、あなたの勝ちだ。しかし残念ながら、10年前に死んでいた方が良かったというような悪い子に育っていたら、私が治した心臓は返していただきます。どうです？ 悪い話じゃないでしょう」

私は孫のベッドから立ち上がることもできないまま、ただポカンと口を開いて、悪魔を名乗る男を見上げる他無かった。

いきなり悪魔だの賭けだの言われても、そもそもどこに信じる余地があるのだから、それが当たり前の反応と言うものだろう。

「おや、信じられない？では論より証拠。今すぐに、お孫さんの心臓を治して差し上げます」

そう言って、男は消えた。

そう、目の前から消えたのである。

そして、すぐさま電話が掛かってきた。嫁からだ。

『お義母さん、あの子の心臓が治ってるって、お医者さんが奇跡だ
って——』

私はその言葉に愕然とするしかなかった。念のため、もう一晩入院すると言うことで、嫁は孫に付いて病院に泊まり込むことになった。おそらく、息子も会社から直接病院に向かうだろう。

「奇跡……………」

「いいえ、悪魔の力です」

先ほどと同じように唐突に姿を現した若い男に、私はもう驚かなかった。神の奇跡だろうが、悪魔だろうが構わない。私の孫が助かったのだから。

「ああ、なんてお礼を言ったらいいのか」

「礼など無用です。賭けに乗ってくださいるなら、少なくとも10年は、お孫さんは元気に過ごせるでしょう。しかし、賭けに乗らないと言うのなら、また心臓を元の状態に戻します。さあ、どうしますか？」

私が断れるはずなど無かった。

しかし、この賭けは随分とこちら側に有利ではないだろうか。あくまでも、『私』の気持ち次第なのだ。仮に悪い子に育ったとしても、良い子だと私が言えば私の勝ちなのだから。

悪魔が去った後、まるで夢を見ていたようなおぼつかない感覚のまま、私は楽観的にそんな事を思って、笑った。

—— 10年後。

高校の入学祝いに、息子一家が家族水入らずで旅行に行った帰りだった。トンネルの中での多重衝突事故に巻き込まれ、息子夫婦はそのまま帰らぬ人に。

一命を取り留めた孫は、しかし身体の半分に火傷を負い、このままベッドから起きあがる事はできないだろうという酷い有様。

目も見えず、声も出せず、孫はただ泣き続けている。両親と一緒に死にたかったと、言わんばかりに。

そんな孫のために私がしてやれる事は、ただ一つだけだった。

「10年前に死んでいた方が良かったわね」

瞬間、孫の胸から血が吹き出した。

「賭けは私の勝ちですね。心臓は頂いていきます」

突然現れた悪魔に、私は驚きなど欠片も感じなかった。

「この事故、あなたが仕組んだんではないでしょうね」

「さてね。案外、神様の仕業かもしれませんよ？」

そんな言葉と、悪魔にふさわしくない優しい笑みを残し、悪魔は消えた。

だが、私はもう知っている。

神様が、何も見ていてはくれないって事を。

だから、これはやはり悪魔が仕組んだ罠だったのだという事を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860p/>

悪魔の賭

2010年12月8日22時10分発行